

# THE YMCA

## 日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をとおして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2017年4月1日発行 (毎月1日発行)  
1947年10月27日 第三種郵便物認可  
本体価格45円 (外税) (送料62円)  
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟  
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7  
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641  
URL: <http://www.ymcajapan.org/>  
発行人/島田茂 編集人/山根一毅  
印刷/あかつき印刷株式会社

## ボーダーをこえた つながり創りだすYMCA —ユースエンパワメントを通して—

日本YMCAユース委員長・世界YMCA同盟常務委員  
廣瀬 頼子



私は、子どものころから、YMCAのキャンプや水泳にメンバーとして参加し、大学入学後は、ボランティアとして、国内およびアジア・太平洋地域や世界YMCAのユース活動に参加してきました。現在は、ユースの皆さんとこれからのYMCAをつくっていきたくて願ってユース委員会で活動しています。ここでは、これまでの経験を通して感じたことについてシェアさせていただきます。

今日、SNSなどで様々な国の人とやりとりができるようになるなど、グローバル化を感じる場面がある一方、本当の意味で私たちが世界を見つめているのか (think globally) 疑問に思うことがあります。日々のニュースを見ると、むしろ、人を区別する境界 (ボーダー) がますます強調されるようになっていとも感じます。ボーダーは、国だけでなく、文化、民族、宗教、障がい、性別、年齢などにも見られます。そしてそれは、時に人と人のつながりを分断し、排除することもあります。「自分とあの人は違う、分かりあえない」と。

この中でYMCAは、様々なボーダーをこえたつながりを創りだそうとしていると思います。そこでYMCAが大切にしていることは3つあると思います。

まず、顔が見えて信頼できる関係です。YMCAでは、目の前の「あなた」と「私」のつながりが大切にさ

れます。私のYMCA活動を振り返っても、一緒に活動した各地の友人の顔が思い浮かびます。このつながりは、同じ思いを持って活動している仲間が世界中にあり、自分一人じゃないことを教えてくれました。

次に、「弱さ」を受け入れることです。初めて世界YMCAのユース研修に参加した時、私はコミュニケーションに不安を持っていました。しかし、集まったメンバーは、私が不器用に語った言葉一つひとつに丁寧に耳を傾けてくれました。社会的に「強い」、「カッコイイ」とされるところだけでなく、「弱い」とされるところも全部含めて一人ひとりの存在が丸ごと受け入れられることが重要だと感じました。

3つ目は、より生きやすい社会へと変えていくために声を上げることです。厳しい競争社会の中で、生きにくさや疑問を感じている人もいます。しかし、特に若い世代が社会に対する思いを表明するのは国を問わず簡単ではありません。YMCAは、ユースが未来への希望を失わず、こんな社会にしたいという声を上げ、行動し、そのための支援を得られる場づくりとしてのユースエンパワメントに取り組んでいます。

この世界的なYMCA運動に、ユースの皆さんと一緒に取り組めることを楽しみにしています。

### 日本YMCA同盟 新総主事紹介

#### 第15代日本YMCA同盟総主事 神崎 清一

##### 【ごあいさつ】

YMCAは事業・プログラムに参加されるすべての方々、そしてボランティア、会員、スタッフとして関わってくださるお一人おひとりが「変えられていく」場所です。「人と人」が寄り添い、互いに支え合って生きていくことは大切であり、自分自身にとって喜びでもあることを、私たちはYMCAで経験することができます。神様に見守られ生かされていることに気づき、すべてのことに感謝できる人を育んでいく組織でありたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

##### 【プロフィール】

- 1953年 大阪生まれ
- 1981年 筑波大学大学院修士課程 (体育方法学野外教育) 修了
- 京都YMCA入職 ウエルネス (体育野外) 担当、主任、部長を歴任
- 2002年 財団法人京都キリスト教青年会副総主事、事務局長
- 2003年より 財団法人京都キリスト教青年会総主事
- 京都YMCA国際福祉専門学校校長、常務理事
- 2011年 公益財団法人京都YMCA代表理事
- 2015年 舞鶴YMCA国際福祉専門学校校長
- 2017年 第15代日本YMCA同盟総主事就任



##### 【全国YMCA】

- 全国YMCA総主事会議会長/ウエルネス担当総主事/総務担当総主事/国際担当総主事 等歴任
- 【日本YMCA同盟】
- 日本YMCA同盟常務委員 (2008年より)
- 日本YMCA同盟評議員 (2008~2014年)
- 日本YMCA同盟理事 (2014年7月~)
- 中期計画策定委員、推進委員 等歴任

##### 【現在の他団体役職】

- 京都府私学審議会委員
- (公社)日本キャンプ協会専務理事
- 京都府レクリエーション協会会長
- (一社)京都府専修学校各種学校協会会長 他 行政、団体等役員・委員



横浜YMCA

座学もフィールドワークも、どちらも

—「多文化相談ボランティア養成講座」

横浜YMCAは、NPO法人かながわ外国人すまいサポートセンターと共催で「多文化相談ボランティア養成講座」を開催しています。私たちの地域で生活する「外国人」「外国につながる人びと」はどのような思いを抱えて暮らしているのか、当事者や支援者をスピーカーとしてお招きし、フィールドワークを行って活動場所などを訪ねています。



横浜市中区若葉町界隈を歩く。いろいろな人を受け入れてきた、横の深い町

2016年度は「外国人を取り巻く法整備」がテーマとなりました。前后期、各4回講座は3回の座学と1回のフィールドワークで構成されていますが、初めての参加者はまず「入門編」で、外国人という概念や「共に生きる」という考え方を学びます。受講生は毎回、社会人やNGO関係者、大学教授や学生などさまざまです。2016年度後期には4人の大学生・大学院生も参加しました。ここでは、彼らコースのコメントを通して活動を紹介します。

横浜YMCAスタッフ 高村 文子

各回を終えて、ユースのコメント

第1回

「オーストラリアの多文化政策と日本の多文化共生」

オーストラリアでは、移住してきた子どもたちの母語と英語の教育が充実しており、彼らのアイデンティティ形成に大きく影響すると感じました。ただ、オーストラリアとはさまざまな点が異なっているので、日本でも独自のサポート体制を整えていきたいと思います。

第2回

「共に生きること—若者の視点から—様々な立場からのパネルトーク」

「自分が持っているルーツの文化」と「自分が成長してきた文化」の書籍、自分の通称名と本当の名前など、私自身の経緯とリンクしていて、納得できたことがたくさんあります。「自分らしく生きる」とは、すべての人の課題なのだと思えました。

第3回

「ハイトスピーチと向き合おう」

「自分もハイト側だったかも」という思いと、それを「嫌だ」という感覚。その両方が、私の中にもあります。「表現の自由」という言葉の陰にみられる差別を「自分ゴト」として捉える力を付けることが、生きやすい町をつくる力になると思います。

第4回

フィールドワーク「横浜市中区若葉町界隈」

通っていた高校の隣に、こんなにも多文化な町があるとは……。仕事の選択肢が限られていて、タイ料理やマッサージの店が多いという町の特徴が少し分かった気がします。多文化共生について知るにはまず、自分の住む地域や近所からアプローチすべきです。

全4回を終えて、ユースのコメント

外国籍の方の現状もそうですが、自国のことも知っておかないと。

他国での「多文化」に関して勉強することで、日本には今、何が足りないのかが気付くことができました。

日本にいる外国人を支援するには、相手の国や地域の文化、歴史を学ぶことが必要だと気付きました。ネットや資料だけでなく、実際に歩いた方がもっと勉強になります。

外国籍である当事者にも会って話を聴くことができました。座学もフィールドワークも、どちらもとても楽しかったです！

◎ Yes!! We are Empowered!! ◎

～とちぎYMCAのユースリーダーが中心になって「クリアファイル」を作成！～

2015年度より、YMCAに連なる全国のユースに向けて「クリアファイル」をお渡ししています。2016年度は日本YMCA同盟ユース委員会からの依頼を受けて、とちぎYMCAのユースリーダーたちが中心になって作成、13,000人の手元に届けられます。

今回は、リーダーたちが「ファイル」に込めたメッセージです。今回、ファイル作成を行うにあたり、私たちは「つながる」をメインメッセージに掲げました。一緒に活動する仲間が存在が心の支えになっていること、リーダーズフォーラムや日本YMCA大会などで出会った、同じ志を持つ仲間が存在が自分たちの原動力になっていることなどが、話し合いの中で挙げられました。そこでファイルには、YMCAを通して「つながった」思いや出会いを大切に、さらに、未来へ「つなぐ」ことができるようにという願いを込めています。表面のデザインには、たくさん色が混ざり合う様子を描きました。異なるパーソナルカラーを持つ人びとが集い、つながることで、新しい色を生み出せること、そして、自分(の色)は他の人を支えられる存在であることを表しています。この度は、このような機会をいただき、ありがとうございました。「Yes!! We are Empowered!!」は私たちユースの強い思いです。このクリアファイルが全国へ思いをつなげてくれることを祈っています。とちぎYMCAユースボランティアリーダー 金安 理香(ヤンリーダー)/伊藤 綾音(なっちリーダー)

学生YMCA

共に悩み、共に行動する —「学生YMCA日韓交流プログラム」

「学生YMCAの日韓交流プログラム」は、1991年から日本と韓国の学生YMCAとで始めた国際交流プログラム。隔年で両国を訪問し、朝鮮半島と日本の間に横たわる戦争責任や在日韓国朝鮮人の歴史、日韓の若者が抱える問題をテーマに、日本人・韓国人・在日韓国朝鮮人それぞれの視点から、学びと交流を重ねています。



4泊5日の熱い時間を過ごした日韓の仲間たち

立教大学YMCA4年 高 彰希さん

学生YMCAに所属してから4年。国際プログラムにも多く参加してきましたが、中でも「日韓交流プログラム」にはとても思い入れがあります。在日コリアン3世として生まれた私は、日本と朝鮮半島の懸け橋になりたい、差別や偏見をなくしたいと思い、2年前に韓国で行われた本プログラムに初めて参加しました。そして今回は、さらに意義深く学びの多いプログラムにしたいと思い、運営委員として参加することを決めました。

「We are the World—手を取り合って生きること—」18回目を迎えた今回はこのテーマのもと、講演やフィールドワークを行い、日本と韓国におけるマイノリティーの現状、差別や偏見をなくすための取り組みについて考えました。韓国の学生は、密蔵の原子力発電電塔の建設を巡る議論の中で、「大きな利益のための多少の犠牲は仕方ない、という意見に私は反対する」と語りました。私たちは日常の中で、いじめ問題や障がい者殺傷

事件、原発事故やヘイトスピーチのような民族差別についてよく耳にしますが、その当事者の痛みにも、本当の意味で気付いているだろうかと思われました。

「関心を持つ」とは、当事者の「痛み」に心のセンサーが「共振」し、共に悩み、共に行動していくことであるという講師の言葉に、私自身も、社会から排除され苦しんでいる人の痛みを知り共に歩んでいきたい、差別を許さない社会をつくっていきたくて強く思いました。私たち日韓の学生は共同決意文を作成し、マイノリティーへの差別や偏見をなくすために、「より低いところ、より苦しいところ」で行動することを決めました。

YMCAで共に過ごし、寝る間を惜しんで語り合った仲間たちは、今も日本で、韓国で、そして世界で活動しています。これからYMCAにつながる後輩たちにも、このような出会いや経験をつないでいきたいと思っています。共に悩み、共に行動していきましょう。

YMCAはやっぱり! 「Think Globally, Act Locally」

—ここは、世界を見つめ、地域に生きる場所—

全国35の都市YMCA・34の学生YMCAでは、国内外のネットワークを生かし、さまざまな活動を行っています。その中には、普段私たちが親しんでいる地域にしながら、異なるルーツや背景を持つ人たちと出会うプログラムもあります。

どうしたら互いの違いを認め、いのちを大切にしたい、それぞれが輝きながら共に生きていく世界をつくることのできるだろう……。

全国のYMCAで、今日もユースたちが考え、話し合い、「世界を見つめ、地域に生きる」活動を行っています。この春、あなたもその仲間に加わってませんか?

東京YMCA

言葉は通じなくても —「東京—北京YMCAパートナーシップ山中湖キャンプ」

キャンプの文化が根付いていない中国のYMCAから親子を招いて、グループ活動や自然に親しむ機会を提供することを目的に、昨夏東京YMCAのキャンプ場で初めて実施した「東京—北京YMCAパートナーシップ山中湖キャンプ」。年長から小6までの子どもたちに、YMCAの専門学生と中国人留学生がユースリーダーとして寄り添い、4日間寝食を共にしながら交流を深めました。



野外ではバームクーヘン作りにもチャレンジ

東京YMCA社会体育・保育専門学校2年 佐々木 れいさん

「言葉の壁」に不安を抱えながらのキャンプ初日、一緒に参加した中国人留学生のリーダーと私とでは、子どもたちと取るコミュニケーション量に差がありすぎて、寂しく思うこともありました。また、食事の席に着くなり「いただきます」の言葉もなく食べ始めたり、みんなで一緒にお風呂に入ることを拒まれたり、日本の常識が通用しない場面に戸惑うこともありました。

それでもずっと一緒にいると、少しずつみんなの話したいことが分かるようになりました。あるお母さんから教わった簡単な中国語で話しかけると、子どもたちもしっかり答えてくれ、いつの間にか一緒に楽しくお風呂に入ったり、「いただきます」を言うまで待つようになったことに気付きました。

お別れ前夜のキャンプファイヤーでは、いろいろな気持ちが込み上げてきて自然に全員とハグをしていました。中国語を覚えてくれたお母さんには、「他の国の言葉を覚えることなんてずっと面倒だと思っていました。でもあなたから中国語を教わって、もっと知ってみんなと話したいと思いました。こんな気持ちは初めてです。謝謝」と伝えました。外国語を学ぶことの意義を初めて身を持って知りました。

一番うれしかったのは、なかなか意思の疎通ができなかった最年長の女の子から、「一緒に北京に帰ろう」と最後に泣きながら言われたこと。言葉はほとんど通じなかったけれど、心は通じたんだと思いました。



富士登山の合間に、上段右が佐々木さん

神戸YMCA

新しい世界、さまざまな違い

—3保育園合同「国際DAY」

3保育園が毎年合同で行う行事「国際DAY」には、2年前から神戸YMCA学院専門学校日本語学科の留学生を招くようになりました。2016年10月25日のゲストにスペインからの留学生を迎えることが決まると、1カ月前から保育園はスペイン色に! 園児たちはあいさつの言葉も覚えて、この日を待ちました。

迎えた当日、2人の留学生からスペインの歌や遊びを教えてもらったり、一緒に食事をしたり……子どもたちは新しい世界を知り、さまざまな違いを受け入れていきます。そして「国際DAY」は留学生にとっても、日本語で自国の文化を伝えることができる、自信を持てる機会となっています。

ガルシア・コルゾ・バネッサさん

スペイン人として、日本の保育園で自分の文化を紹介すると思いがけないチャンスは私の心を捉えました。同時に、私が子どものころに、学校に外国人が来てくれたら良かったなあと思いました。子どもたちと話し合ったり、スペインの歌を歌ったり、ゲームをしたりして、とても楽しく過ごしました。この楽しい出会いの締めくくりに、保育園の食堂で一緒においしい日本のお料理をいただきました。先生に言われなくても、自分で食器の後片付けをする子どもたちの様子は、本当に素晴らしいです。

レオン・プリエゴ・セルヒオさん

YMCAのスタッフに保育園の「国際DAY」でスペインの文化を紹介してほしいと頼まれた時、私はとてもびっくりしました。なぜなら、小さい子どもたちは海外に興味を持っていないと思っていたからです。しかし、スペインの文化紹介で、バルセロナにある教会「サグラダ・ファミリア」や「エリア」の写真を見せると、とても興奮して、拍手をしてはしゃいだり……子どもたちの反応は信じられないほど面白かったです。「家では靴を履いているの?」など、いろいろ質問されて、やっぱり子どもの好奇心は素敵だと思います。



# NEWS

各地の動きをご紹介します。

## ●「イジメのない世界をめざそう2017」 YMCAピンクシャツデー — 全国YMCA

2月22日、全国のYMCAは公平で平和な社会を目指して、「ピンクシャツデー」に取り組みました。2007年にカナダの学校で、ピンク色のシャツを着て登校したことをはじめられている少年を見た2人の学生が周りに呼び掛け、多くの生徒と共にピンク色のシャツを着て登校しました。これをきっかけに学校から自然といじめがなくなったというエピソードは、インターネットを通じて世界に広がりました。

YMCAの「ピンクシャツデー」は2015年に横浜で始まり、昨年から全国での取り組みとなりました。今年も、全国YMCAのスタッフやリーダーをはじめ、保育園や学童の園児・児童たち、スイミングやサッカースクールの子どもたち、専門学校や学生YMCAの学生たちなど、YMCAにつながるたくさんの皆さんがこの活動に参加しました。

YMCA内部のみならず、関係団体や地域・企業からも多くの賛同を得ました。サッカーJリーグでは、昨年に引き続き、大阪YMCAと共に「セレッソ大阪」の選手たちが力強いメッセージを発信してくださいました。横浜YMCAスポーツ専門学校が育成パートナーシップを結んでいる「横浜F・マリノス」の選手の皆さんもこの活動に参加、DFの新井一輝選手からは、「サッカーはチームワークがとても大事です。そして、本当のチームワークは、お互いを理解し合おうとすること、違いを認め合おうとすることから生まれると思います。(中略)誰かの失敗やミスを責めたくなくなることもありますが、そんな時こそ、全力でサポートやカバーするようなプレーを心掛けます。いじめはやめましょう。いじめている人に声をかけましょう。」というメッセージが寄せられました。



「ピンクシャツデーに賛同します！」を合言葉に、ピンクに染まった山台YMCA

全国のYMCAがピンクに染まったこの日は、皆が一つになって、いじめのない社会に思いをはせる1日となりました。

日本YMCA同盟 有田 征彦

## ●ネパール支援 — 京都YMCA・日本YMCA同盟

### ◆ネパールチャリティーバザーを実施

京都YMCAでは、カウンターパートとして交流を重ねてきたネパールYMCAの児童養護施設 Laliguras Children's Home への支援を目的に「ネパールチャリティーバザー」を開催しています。4回目を迎えた今年も、ネパールYMCAの活動やネパールの魅力をより多くの方々に知っていただくため、さまざまな企画を用意しました。



民族衣装サリーを体験し、着付けをしてくれたのは、京都YMCA日本語科の卒業生

ネパールYMCAの子どもたちの写真展示をはじめ、ネパール人の神戸YMCA留学生と京都YMCAボランティアを招いての文化紹介、彼らと楽しく交流できるネパールカフェ、地域の皆さんに大人気の物品バザーやネパール料理などが楽しめるアジアフード屋台、民族衣装サリー体験など、ネパール色盛りだくさんのイベントとなりました。また当日会場で、ネパールYMCAの子どもたちのために「未使用文房具の寄附」を呼び掛けたところ、800品を超えるご支援をいただきました。鉛筆など、皆さんの思いが詰まった文房具は、日本YMCA同盟のスタッフが現地へ届けてくださいました。

京都YMCA 關 つくみ

### ◆2015年4月の震災より約2年、ネパールを訪ね

震災直後の呼び掛けに応じ全国より寄せられた募金によって、小学校の再建や被災児童の支援をネパールYMCAや地元の支援者を通して続けてきました。今回は京都YMCAからお預かりした文房具をネパールYMCAにお届けし、各支援地の子どもたちに会ってきました。車で険しい山道を移動すること数時間、山頂では約180人の生徒が通う DEEPSHIKHA イングリッシュスクールの子どもたちが笑顔で私たちを歓迎し、歌やダンスを披露してくれました。ネパールは海外で出稼ぎをする人が多く、英語の習得は大事な



京都YMCAに寄せられた鉛筆を、ネパールの子どもたち一人一人に手渡した

生活手段となっています。貧しい中でも英語教育に力を入れている私立学校に多くの生徒が通っています。YMCAは、家が全壊するなど大きな被害を受けた地域の子どもたちに、制服やバッグ、文房具などを3年間にわたって支援しています。引き続き、子どもたちが未来に希望を持てる働きを日本とネパールのYMCAが協働して行います。

日本YMCA同盟 市来 小百合

<お詫びと訂正> 2017年3月号の4面「2016年度日本YMCAユースボランティア認証者」にて、「さいたまYMCA」と表記しておりましたが、正しくは「埼玉YMCA」となります。深くお詫びして訂正させていただきます。

## アジア・世界のYMCAから

### ◆平和の日～チャリティーイベントを開催

— 香港中華YMCA

香港中華YMCAは、2007年から「平和の文化」キャンペーンを行っています。昨年の11月20日にはチャリティーイベントを開催し、参加者とワイズメンズクラブからの寄附金8,500ドルによって、高齢者に温かい食事を提供するプロジェクトの支援が実現しました。このイベントの最後には、手で鳩の形を作って掲げる「鳩のジェスチャー」のギネス世界記録に挑戦し、YMCAのメンバー528人で見事に達成しました。鳩は平和の象徴であり、「鳩のジェスチャー」はYMCAの平和の日に向けた香港からのメッセージです。



鳩のジェスチャーでギネス世界記録を達成

### ◆欧州ボランティアサービスとしてボーンマスで活動しています

— ヨーロッパYMCA同盟

ルーマニア人のアンドレアさんが、イギリス南部の街、ボーンマスに来てから4か月が過ぎました。ルーマニアでYMCAのボランティアを8年間行い、現在は欧州ボランティアサービスの一員としてボーンマスで活動しています。担当は、ホームレスの方々の支援のためのイベントのプレスリリース、SNSによる情報の拡散、プロモーション用資料の制作といったマーケティング部門の業務です。週末には寮やクラブでのパーティーで、仲間との交流や異文化体験を大いに楽しんでいます。

### ◆難民支援に取り組む考古学者アンナさん

— 世界YMCA同盟、テサロニケYMCA

2016年10月、世界YMCA同盟はギリシャのテサロニケにオフィスを設立しました。このオフィスを通じてテサロニケYMCAの難民プログラムを支援しています。考古学者であるアンナさんはこのプログラムのリーダーです。難民の支援の目的は「物資を届けること」から「ギリシャ社会に溶け込んで一緒に暮らすこと」に変わりました。現在は、シリアとアフガニスタンからギリシャに来た65の家族のために活動しています。アンナさんは「難民と共に生きることで自分が歴史の一部になっていると感じる」と話しました。

●上記トピックの詳細(隔月PDF)は、日本YMCA同盟HPの「世界のYMCA」ページよりご覧いただけます。<http://www.ymcajapan.org/world/index.html>

## ●パレスチナの現状

### — 世界YMCA同盟「聖地訪問の旅」に参加して

2016年12月、世界YMCA同盟企画の聖地旅行に参加しました。参加者は12人。私は今までにイスラエルを2回訪問していますが、今回はエルサレムに始まり、ナザレ、そしてガリラヤ湖などイエスの足跡をたどり、降誕節はベツレヘムで迎えました。



国連安全保障理事会は、この12月にイスラエルのパレスチナ入植を非難する決議を採択しましたが、それでもイスラエル政府は、ユダヤ人移住者をパレスチナの占領地に入植させることをやめません。

私たちは入植地に近いベツレヘム北西の村に住む農民を訪ねました。周りの農民は皆、土地を売るなどして遠隔地に移住してしまい、ご自身も、何度も転居するよう促されたということです。嫌がらせも多い中、動じることなく彼が守る土地で、私たちはオリーブの苗木を植える作業を行いました。パレスチナでのオリーブ植樹支援には、日本のYMCAからの寄附も用いられています。



訪問したパレスチナの農民(左)とガイド(右)

隣接する入植地には、時々イスラエル警察のジープが巡回してきます。「正義による平和」が踏みにじられ、パレスチナの人びとが「Injustice」(不正義)という言葉で何度も口にする状況にあって、東エルサレムYMCAは、虐げられた人びとを支援する働きを続けています。

イスラエルを出発する前日の12月29日、ケリー国務長官(当時)は「アメリカが今まで示してきたイスラエル、パレスチナ両国共存の解決策が、今や危機に瀕している」という声明を出しました。このころ、イスラエル寄りの言動を繰り返すトランプ次期大統領からは、就任と共に大使館をエルサレムに移す、という発言まで飛び出し、大統領に就任した現在も、その意向は変わりません。各国が、三大宗教発祥の聖地エルサレムを避け、大使館をテルアビブに集中させてきた歴史を思います。

YMCAらしいAlternative Tourism(問題意識を持ったツアー)に参加し、私たちもまた「正義による平和」を担う一員であることを、今、強く意識しています。

元アジア・太平洋YMCA同盟会長 谷川 寛